

2006年1月

## イラン南東部地震報告書

CODE 海外災害援助市民センター

飯塚 明子

### 1. はじめに

スマトラ沖地震津波被害に対する復興支援活動におきましては、これまでに日本国内の団体・個人の皆様から温かいご支援をいただいております。スマトラ沖地震津波から12月26日で1年を迎えるにあたり、CODEのスリランカにおける復興支援活動をここにまとめて報告いたします。

### 2. イラン南東部の被災状況

発生時： 2003年12月26日 午前5:26

マグニチュード： 6.3

被災地域： ケルマン州バム市・周辺村

被災者： 20万人

死者： 42,000人以上（1月21日IFRCレポート参照）

その後イラン政府により、3月29日イラン政府は死者を26,271人。行方不明者525人と下方修正。

建物の倒壊率： 約85%が全壊もしくは半壊

### 3. 復興支援活動について

これまでの支援

支援1：AHKK大型テント支援

バムの被災地の小さな公園にテント2張りで子どもたちのケア AHKK<sup>1</sup>の

---

<sup>1</sup> AHKKは元々はテヘランでアフガニスタン難民を中心としてストリートチ

バタニさんという方にバムの被災地で出会い、NVNAD と協働して、協働で、大型テントを提供することになった。

### Hope of Mother（現地幼稚園）への仮設校舎・物資提供

AHKK との出会いから始まり、多くの子どもたちと出会う機会を得た。その中で幼稚園を訪れ、子どもたちが炎天下の中テントもなく遊んでいる姿を目にすることとなった。3 月は日本ではまだ春の始まりだが、イランでは日中は暑くなる。これからの夏に向けて不安に感じている園長さんと話をし、コネックスと呼ばれる簡易コンテナを提供することに決定した。子どもたちが元気に遊んでいる姿を地域の人々が見て元気になってほしいという思いから、子どもたちを部屋の中に入れてしまうのではなく、子どもたちが遊んでいる姿が見える場所を作ってほしいと要望をした。園長先生も賛成して下さり、コネックス 4 台とあずまや 1 台を提供することに決定した。他の幼稚園にも物資の提供を行うことを決定。(2004 年 6 月末終了)

### 支援 3：幼稚園音楽教師養成トレーニング

今回新たないい出会いがあり、新たなプロジェクトが生まれることとなった。元々前回の私たちの視察に同行してくれた通訳のサイド君だ。テヘランで幼稚園の音楽先生でもあり、また月に数回は病院へ行って音楽セラピーとして音楽の楽しさを教えているという経験を持ち、第 2 次の私たちの視察が終了した後も何度か被災地を訪ね、音楽教室を開いてきた。そして 6 ヶ月間バムに滞在することを決め、今は AHKK で音楽教室を開いている。ここイランでは学校では音楽の授業がない。ギターや古楽器などイランの人は音楽好きだが、サイドのように幼稚園向きの音楽をできる先生は多くはない。いつも小さな鉄琴を使って子どもたちに音楽の楽しさを教えているといった感じの彼の音楽クラスは大人気となっていた。

しかし、彼がずっとこちらに滞在することはできず、いつかはテヘランへ戻らねばならない。そこで彼は幼稚園の先生を対象に音楽教師養成トレ

---

ルドレンのケアをしている団体。AHKK は現地の言葉を略したもので、英語略語では APCL と呼ばれている。

ーニングをしたいと提案をした。これは CODE と AHKK が 6 ヶ月間の契約のもとサイードが教師として雇われるという形をとることとなった。早速、バタニさんが福祉局で行われていた幼稚園の先生トレーニング教室でこのことを先生に告げると多くの先生がやりたいということだった。しかし時間的にも場所的にもすべての人をとるわけにはいかないので、サイードが面接をしてみずは 25 人を教えるということになった。この 2 週間サイードは面接で大忙しとなる。CODE はこの教師トレーニングに対して AHKK へのコネックス提供、先生用トレーニング楽器等の提供を行うことを決定した。

サイード音楽教室支援金：\$6,500

#### 支援 4：耐震性建築普及ワークショップ（シェークテーブルテスト実演）

今回の滞在の大きな目的のひとつはインド、アフガニスタンでも行ったシェークテーブルテスト（耐震住宅振動台テスト）を行うことだった。シェークテーブルテストとは、見た目は同じに見えるレンガ造りの家が二つがある。一つはこれまで人々が建ててきた家と同じ工法で建てられたもので、もう一つにはその家に少しの耐震性の工夫を取り入れた家。実際の家  
の 10 分の 1 サイズで作られている。そのミニモデルハウスを振動台というバネで揺れる台の上に乗せ、それを振動させることによって地震の状態を起こす。そうすると、耐震のな  
いこれまでの家は当然ながら崩れ、  
耐震が入られている家は壊れないという簡単に誰にでも理解ができる実験をいうのだ。

左が耐震なし、右が耐震あり。

8 月末より国連地域開発センター（UNCRD）の研究者ビシュヌ氏とネパールの NGO「NSET」の技術者がバムに滞在し、どのようなモデルを作成するかなどの計画とデザインを考えた。その後 1 ヶ月に渡り、NSET の技術者によって指示を受けながらバムの若者 6 人がモデルハウスの作成にあたった。その中の一人アリ君は、地震によって両親を亡くしていた。このモデルハウスを作成することを通して、「耐震性を知っていれば、あんな悲劇は起こらなかった」と言い、耐震性の重要性を学んだ。

ワークショップは、バムの住宅建設を統括する機関である住宅財団とともに開催することになり、約 300 人の地元政府関係者、教育関係者、市民

の方々、建築を学ぶ学生などの参加を得ることになった。シェークテーブルテストの他にも KOBE の経験に関して、建築家の大津敏雄さん、バムでの活動に関して日本の NGO「ピースウィンズ・ジャパン」に発表をしていただき、KOBE、日本の経験をバムに届けると同時にバムで活動する社会学の教授などにプレゼンをしていただいた。また、このほかにも多くのイラン関係者に協力を頂いた。

住宅財団の副代表からは「未だかつてない素晴らしいワークショップであった。」という言葉頂き、バムの方々もとても興味深くみていただけたと感じている。

これをぜひ今後、地域の人々の間で広がっていくような取り組みにつなげたいと考える。

#### **AHKK 新ホール建設支援（現在建設中）（US\$12,000）**

第2次に支援を決定した大型テントの提供を受けて、AHKK の場所が前回の公園の真ん中から目の前にあった血液センター跡地へ場所を移動させていた。ここでは大型テント、小型テント3張、そして図書室、事務所兼宿泊所コネックスがある。子どもたちは朝8時すぎくらいから少しずつ集まってきて、クラスが始まるのを待っている。ここでは毎日朝から何かの授業が行われている。朝から子どもたちのかけ声が大型テントから聞こえてくる。中を覗いてみると空手着を着た怖そうな先生が子どもたちの前に立って「いち、に、さん」とかけ声をかけている。それに合わせて子どもたちも右腕、左腕を前に突き出している。先生の「じゅう」という大きなかけ声のもと「てやーー」と子どもたちが大声を上げている。そして「押忍」と言って終了。人気の空手教室だった。先生にお話を伺うと10年以上も空手を習われており、ここで子どもたち向けクラスと青年空手クラスを開いているとのことだった。

その他にも、ここでは英語クラス、体育クラス、音楽クラス、エアロビクスクラスなどがあり、午前と午後に分けてクラスが行われている。常駐しているのはテヘランからのバタニさんと音楽教室担当のサイドだが、勤務時間帯には幼稚園を担当するアフソニーさん、英語を担当するアレズさん、そしてカウンセリングと図書を担当するモジュデさんがセンター内には滞在している。

その中でまた手渡された日本の子どもたちからの絵の絵画展をそのテント内で行うことも決定した。

このプロジェクトは日本災害救援ボランティアネットワーク（NVNAD）との協働で支援することになった。

AHKK 大型テント支援金：\$5,000（CODE\$2,500/NVNAD\$2,500）

### 「しあわせ運べるように」 ペルシャ語バージョン

阪神・淡路大震災後に被災者である臼井真先生によって作られた「しあわせ はこべるように」という歌があり、今回 CODE 事務局より提案をしこの歌をペルシャ語に訳して子どもたちが歌えないかということになった。サイドにこの提案をすると子どもたちが歌えるか聞いてみようということで、最初にサイドに訳を説明し、そして子どもたちの前で歌ってみることにした。子どもたちはゆっくりとした曲だったのですぐにペルシャ語の歌詞はあるのかと聞いてきた。そこで在イラン日本人の方にご協力を頂き、サイドにペルシャ語訳を送っていただいた。そしてそれをサイドが歌に合うようにアレンジをした。日本版歌詞にも元の神戸に戻そうという言葉が含まれていたが、今回のペルシャ語版にも美しいバムを永遠にという言葉が含まれている。

バム滞在最終日に子どもたちがこれまでの成果を聴かせてくれるということで子どもたちの練習していた大型テントへ行く。

サイドのハーモニカとタンバリンのリズムで 20 人の子どもたちが歌い始める。表現のしようなない感動で胸がいっぱいになる。その後に、子どもたちにこの歌どうかな？と聞いてみると、最初は恥ずかしくて自分の意見を言わなかったけれども、一人が「この歌はバムがまた元に戻れるっていうことをいってるんだよね」といい始めると少しずつ子どもたちが「この歌は悲しいことがあったけれど、またいい日が訪れるっていってるんだよね」って言い始める。感動でまたなにも言えなくなってしまった。

**CODE**

